

## 「和田亀之助写真帳」

五十公野順一

川越高校の百周年記念誌「くすの木」にかかわって四年の歳月が過ぎた。今回の編集作業の過程で川越高校に関するさまざまな発見があったが、なかでも初代教務主任の和田亀之助が撮りためた写真アルバムを手に入れたことはたいへん大きなことであったと思う。

たまたま、写真の準備・調達を役割としていたために和田亀之助とは深くかかわることになったが、古びたアルバムの写真を見るたびに感ずるのは、亀之助の撮影、現像に関する技術とセンスに対する驚きである。当時はレンズの性能も現在とは比較にならないし、フィルムなどはもちろん存在せずガラス板に写真乳剤を塗布した、いわゆる写真乾板に像を焼き付けるのであるから、これだけの写真を撮影するだけでも大仕事であったはずだ。亀之助はそれを遠足や修学旅行にも携行しているのであるから、その労力たるや今の人間には想像することすら難しいものである。

百周年記念誌「くすの木」には紙数に限りがあったため、亀之助が残してくれた写真の大部分は掲載することができなかった。そこで、『紀要』にそれらの写真を掲載し、記録としてとどめることとした。今回は準備に十分な時間をかけることができなかったので、掲載写真のかなりの枚数が「くすの木」掲載分と重複しているがご容赦いただきたい。なお、和田亀之助とそのアルバム発見に至るまでの経緯を「くすの木」から転載させていただくことにする。写真のキャプションはできる限り書き直そうと思ったのだが、この程度のものしかできなかった。力不足を痛感する次第である。

### 『幻の花』を求めて

和田亀之助は、京都の仏具商の家に生まれ、東京神田の物理学校（現東京理科大学）を卒業後数学の教師となる。1899（明32）年27歳の時、新設された川越中学の教務主任（教頭）として赴任し、1903年の12月まで教鞭を執っている。亀之助はそのころ写真に凝っていて、川越中学開校当時の写真をかなり撮りためていたようだ。

この亀之助のアルバム発見のきっかけとなったのが『幻の花』という本である。亀之助の次男として生まれ、戦後、第一次吉田内閣の農林大臣を務め、後に統一前の左派社会党で書記長となる和田博雄の伝記である。

小島良夫氏（中45）と木村定雄氏（中46）により、この本が編集部を持ち込まれたのは、編集委員会が活動を始めたころであった。この本の中で我々にとって特に重要であったのは、博雄が父の27回忌法要のために、兄武彦の家を訪れたときの記述である。「父の法要の始まる前、書斎で兄と父のことを取り留めもなく話していたとき、兄が、ああ博雄、おまえに見せたいものがあるよ、と言って書棚の中から父の遺した古いアルバムを数冊出して

見せた。…「父のアルバム」に貼られている写真は、先輩、同僚、親交のあったらしい同僚一家、川越中学校運動会、卒業生、寄宿舎生徒、軍事教練、川越郊外への自転車遠足、川越郊外の雪…。その作品内容は多彩である。」

この「父のアルバム」が発見されれば、百周年記念誌の大きな目玉となる。

記念誌の写真担当者は、まさに『幻の花』を追い求めることになった。手がかりは、本の奥付のみである。著者の大竹啓介氏とどうにか連絡を取りわかったことは、『幻の花』を発行した1981年当時、亀之助の長男武彦氏（当時84歳）に取材をしており、その際アルバムを見せてもらったということであった。さらに大竹氏は武彦氏の世田谷の住所と、和田博雄の書生であったという寺門功氏の住所を教えてくださいました。

ところがその後、武彦氏には全く連絡がつかず、もうひとつの手がかりである寺門氏に連絡を取ってみると、武彦氏はすでに亡くなり、一人娘の久子氏が小田原に住んでいるという。それから小田原への連絡を始めるのだが、いくら電話をしても連絡が取れない。なかばあきらめかけていた1997年3月、小田原の電話が通じたのである。

声の主は西尾吉一氏。久子氏の次女、佳子氏の夫に当たる。聞けば、世田谷の家には誰もおらず、久子氏が時折風を通しに行っていたが、その久子氏も半年ほど前に他界したとのことであった。小田原の家も転居をすることになっており、この日たまたま電話をとることができたようだ。事情を話すと快く協力を約束してくださいましたが、吉一氏自身はアルバムの存在を全く知らないという。とりあえずこれから遺品整理を始めるので、それらしいものがでてきたら川越高校に連絡を入れていただくということで話は終わった。

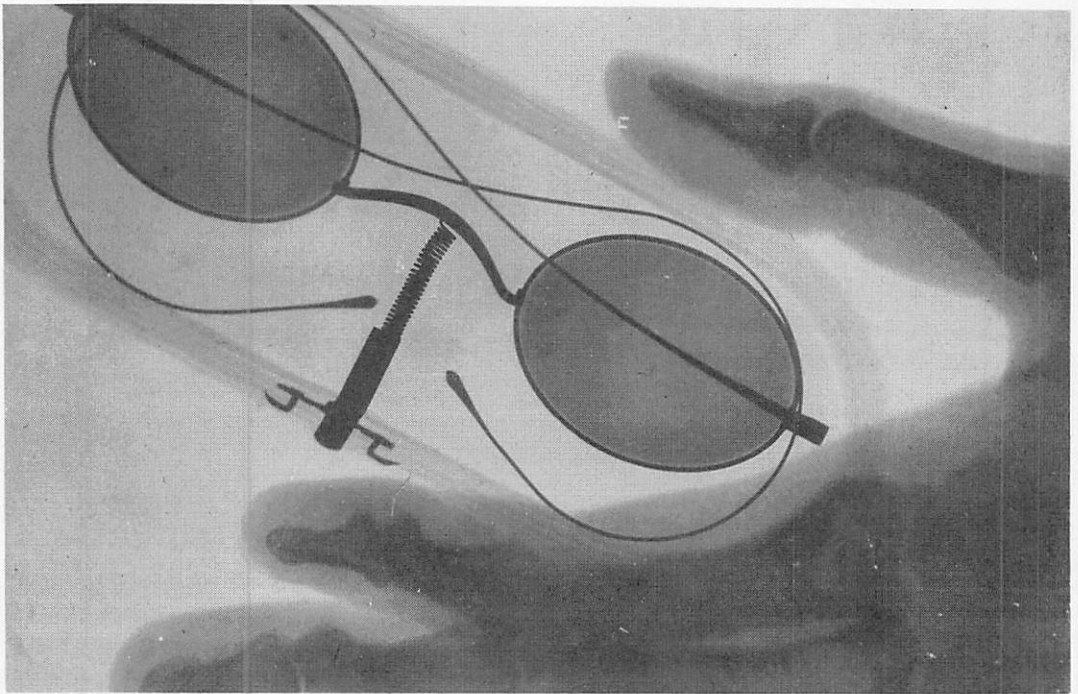
その西尾吉一氏から、アルバムがあったという連絡をいただいたのが1997年9月8日。そして久子氏の長女、川越在住の和田美智子氏からアルバムを受け取ったのが18日のことであった。

「父のアルバム」を手にしたときの我々の興奮と喜びをご理解いただけるであろうか。

まだ生徒のいない、植木すらも見あたらない完成直後の校舎全景をはじめ、まさしく『幻の花』に書かれていた写真が、五冊の古びたアルバムに詰まっていたのである。それらの写真の中にたった二葉、撮影したレンズ名を記録した写真がある。ダルメヤー、クック五類という二本のレンズ名をもとに、今回航空写真を撮影していただいた宮崎一雄氏に調べてもらおうと、当時の価格は一本60～70円、巡査の初任給が10円足らずだったことを思えばとんでもない高級品であったわけだ。

ともかく、開校当初、和田亀之助がいてくれたおかげで、我々は大変貴重な資料を手に入れることができたのである。みなさんも明治時代に思いを馳せて、じっくりご覧いただきたい。

和田亀之助教諭



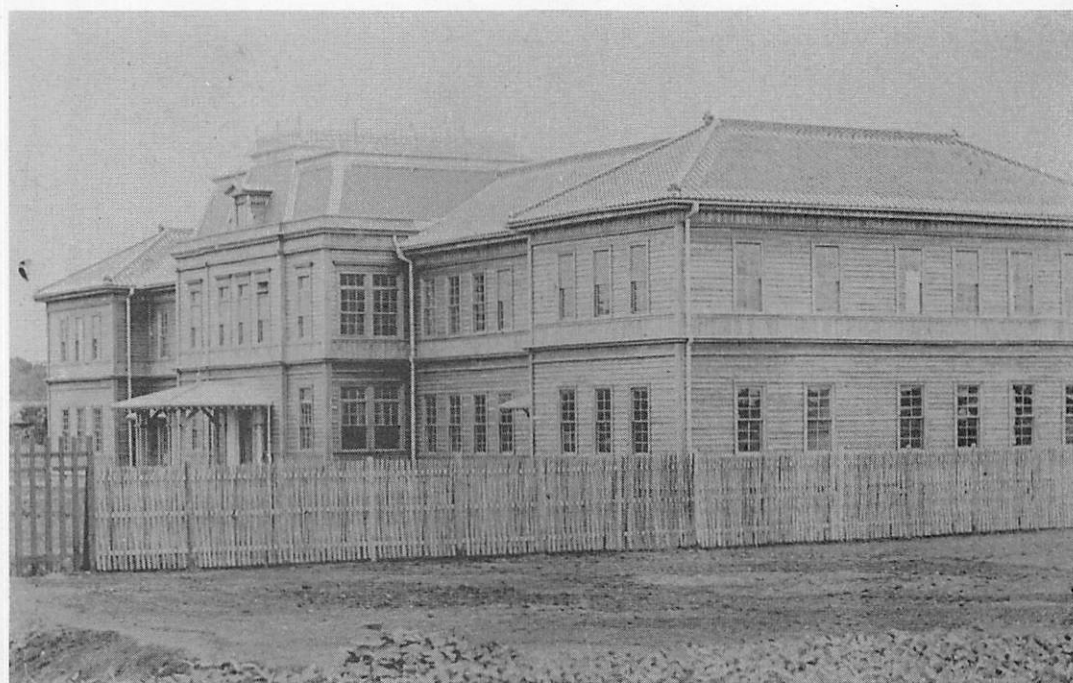
自己の手と眼鏡の엑스光線写真

「明治35年七月末より三週間仙台にて物理化学講習を受く」とある。亀之助のアルバムの中に一枚だけ貼られている異色の一枚である。



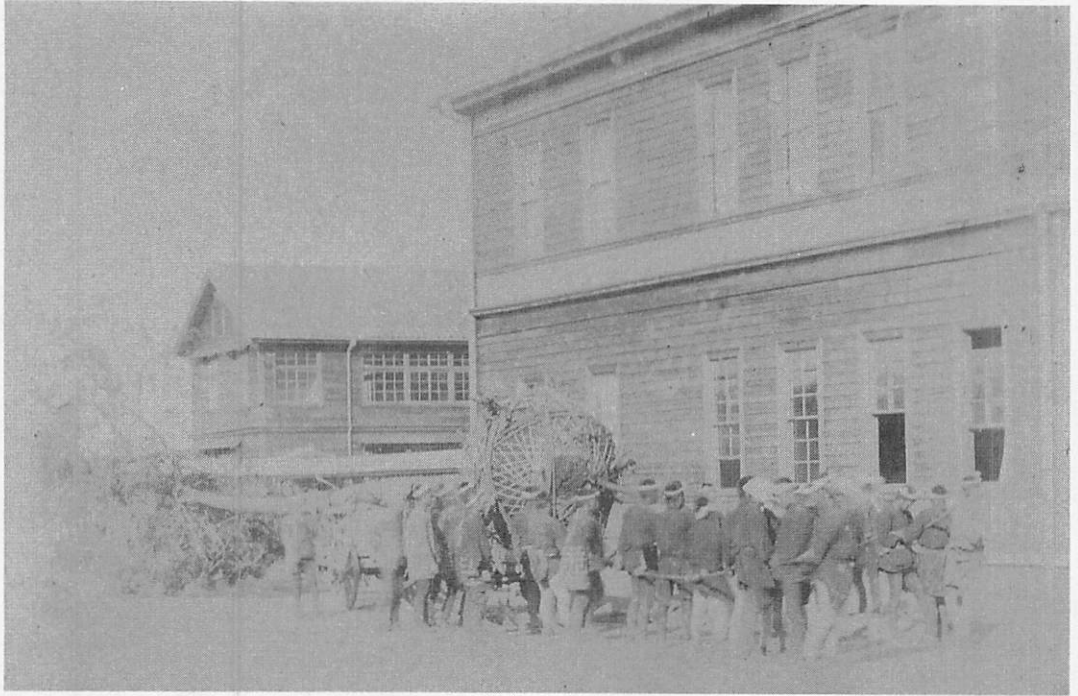
埼玉県第三中学校 明治三十二年七月

1894年以來の県立中学校設置運動が実り、川越城の跡地郭町に校舎が建設された。まだ校舎の周辺に植樹もされず、校舎両翼の特別教室棟もない。校舎を撮影した写真としてはもっとも古いものであろう。



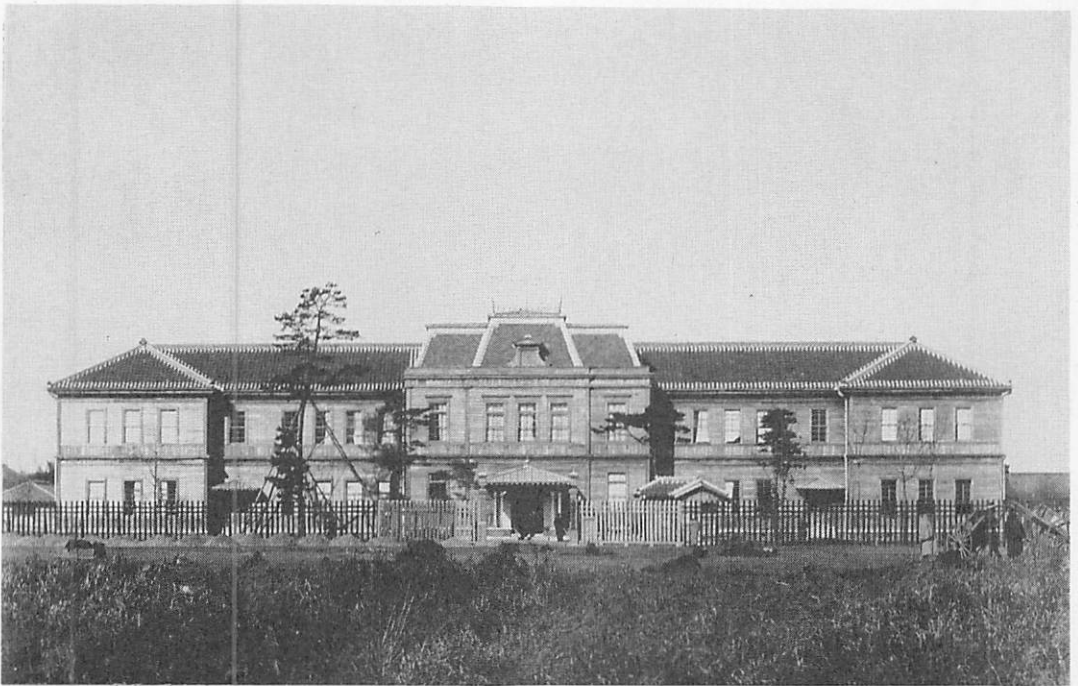
中学校（明治32年7月）

校舎を東南の方角から撮影している。



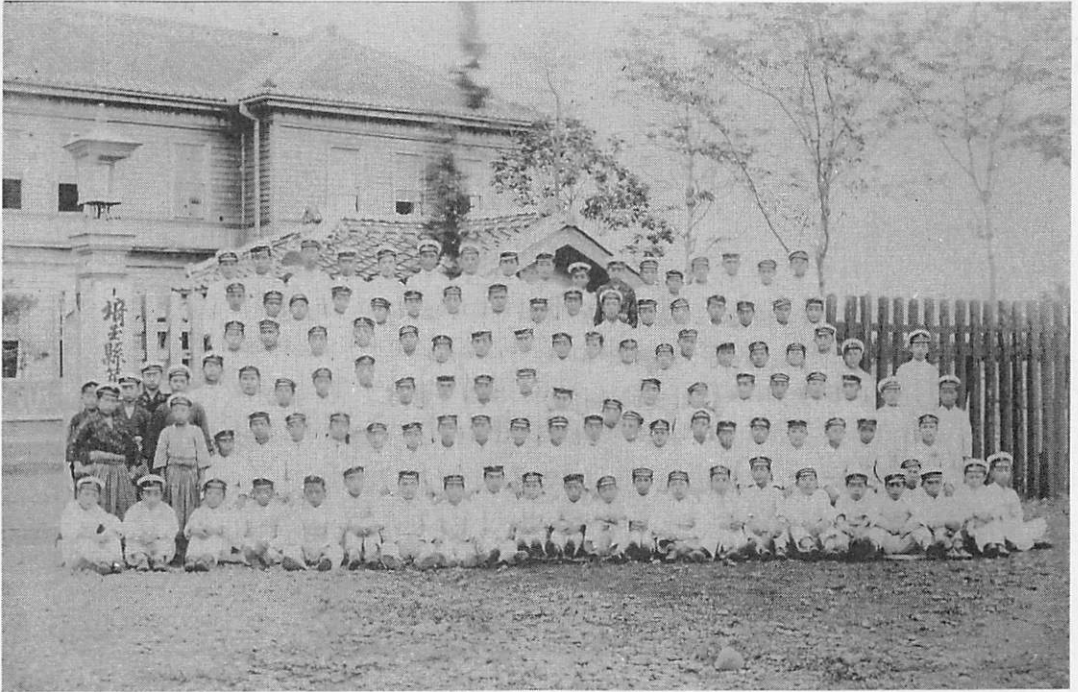
松の木植樹の様子

増野初代校長が父兄会に懇望して植樹されたもの。南大塚の山田平左エ門氏から寄せられたものだという。昭和10年代に枯死したようである。



松の木植樹後の校舎全景（明治32年）

そびえ立つ松の木は川越中学のシンボルとなった。校舎両翼の特別教室はまだ建っていない。



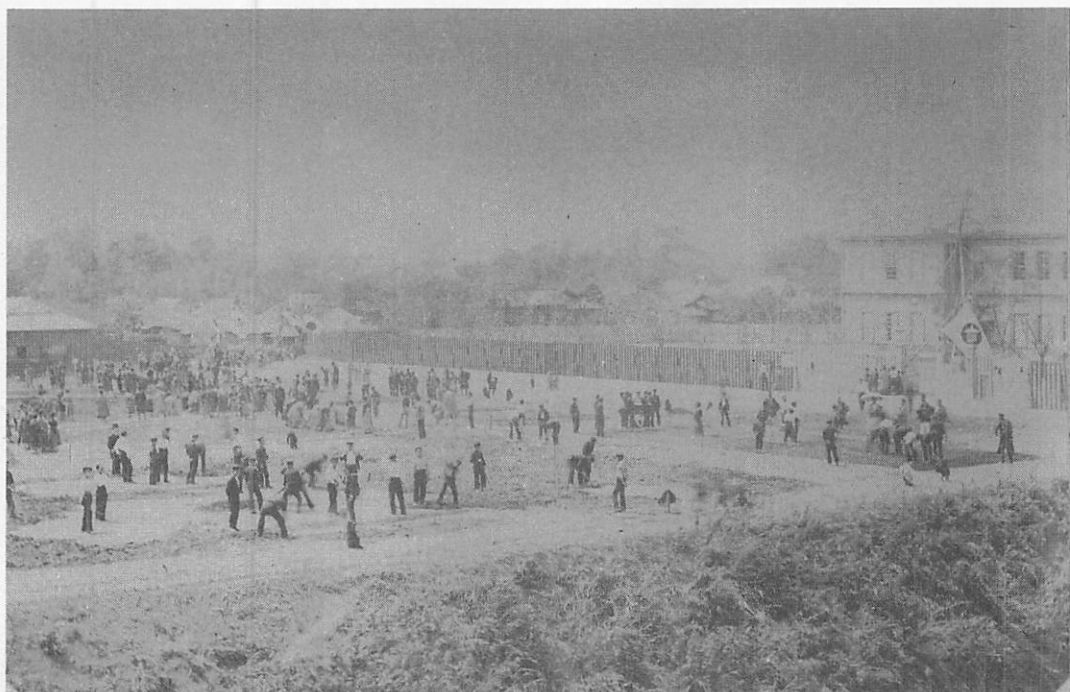
一年級

当時の学則の服装規定に「制服ノ服装ヲ為ス能ハサルトキハ事由ヲ具シテ学級監督ノ許可ヲ経テ袴羽織又ハ袴ニテ昇校スルヲ得ルモノトス」とある。



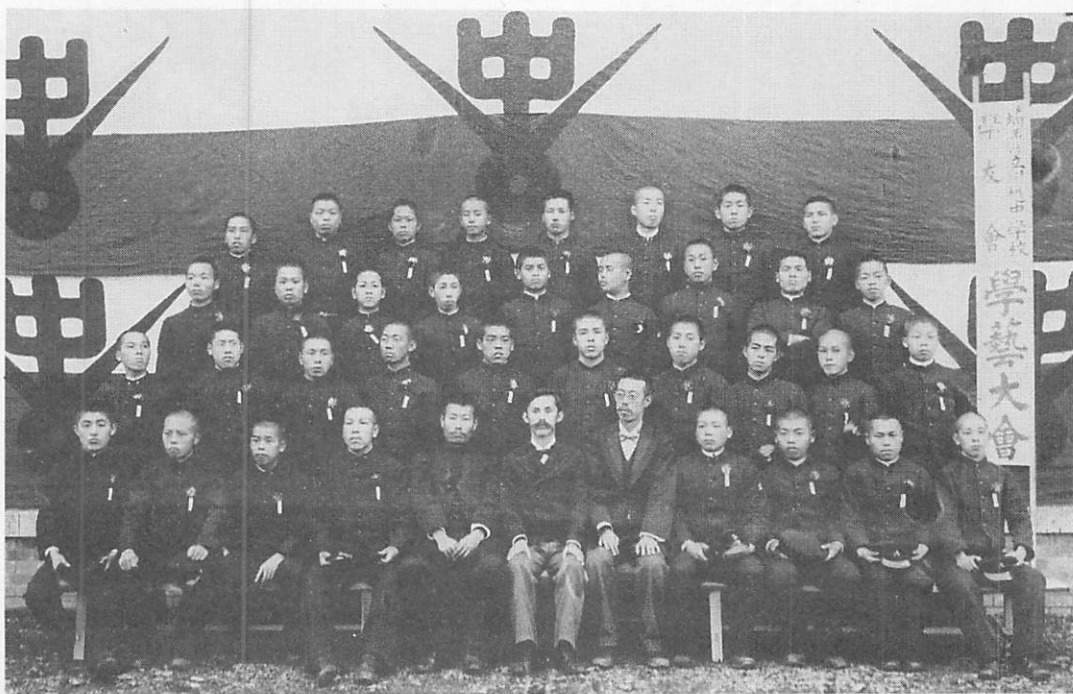
瑞葉園開設 (明治33年 5月)

大正天皇の結婚を祝して校舎南側に開設された。



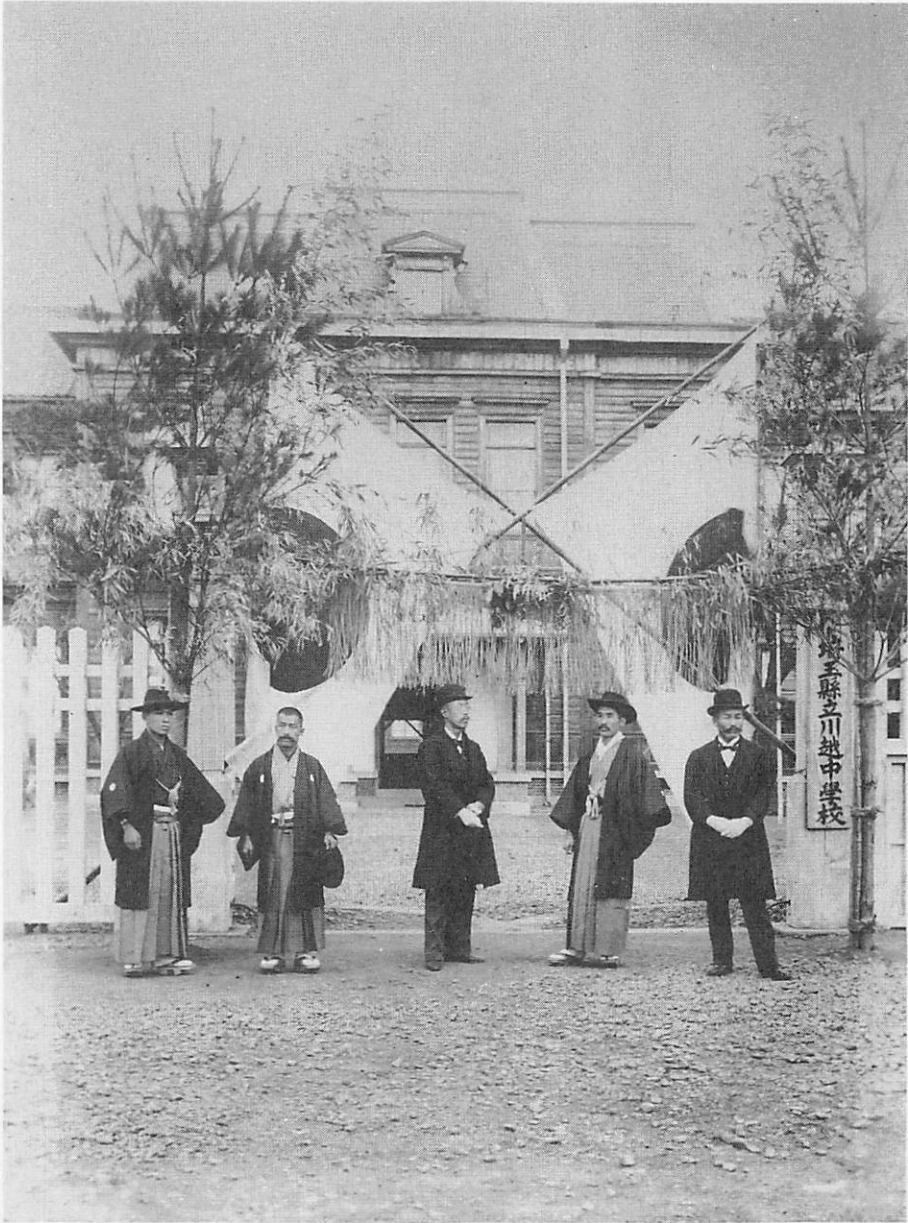
瑞葉園の開設（明治33年5月）

7頁の写真と同じ日であろう。全生徒による作業の様子がわかる。



学芸大会の記念撮影（明治34年）

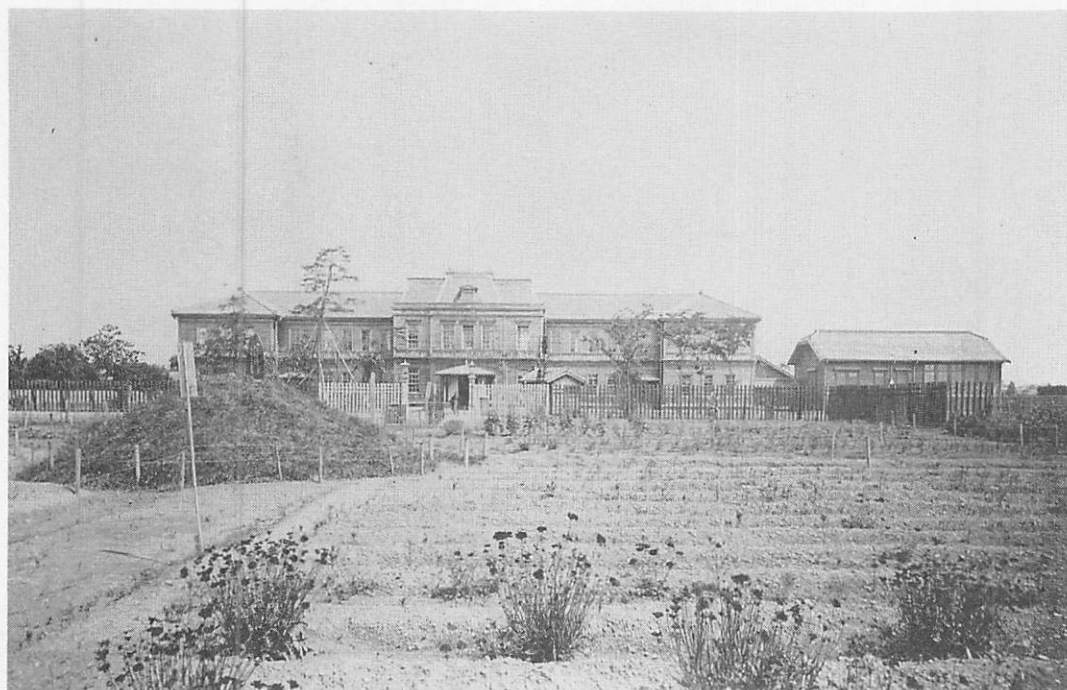
横断幕にみられるのは学友会のマークである。学友会は1900年（明治33年）に発足した組織で、会員は生徒であるが会長が校長、役員は本校職員が当たるといったものであった。



校門前での記念撮影（明治36年正月）

新年拝賀式の時の記念撮影であろう。人物の配置、ポーズなどに亀之助のセンスとこだわりが感じられる。





校舎全景（ダルメヤー広角レンズ使用）

左手前に見えるのが豊栄丘、右側が理科教室棟、奥に見えているのが雨天体操場。後の昭和天皇の誕生、命名を記念して、前年開設された瑞葉園に築かれたのが豊栄丘である。



埼玉県立川越中学校第1回卒業生

明治36年4月に撮影された。第1回の卒業生は29名であるが、撮影が卒業式の後であったためか、数名がかけている。



運動会（明治35年）

川中の運動会は地域の一大行事であった。見物客の服装、頭髪などに当時の風俗が偲ばれる。右手隅に小さく氷川神社の鳥居が見えている。



“Bicycle Race Feb.34”

珍しい自転車競技のスナップ。自転車を強調するために「覆い焼き」の技術を使っている。



テニスに興ずる教職員（明治35年6月）

テニスは開校当時より、職員生徒間でさかんに行われていた。



和田亀之助肖像

松を配置したのも、陰影のある表現も亀之助の計算によるものであろう。当時セル  
フタイマーのようなものがあつたのか、あるいは何者かにシャッターを押させてい  
るのかは知るすべもない。



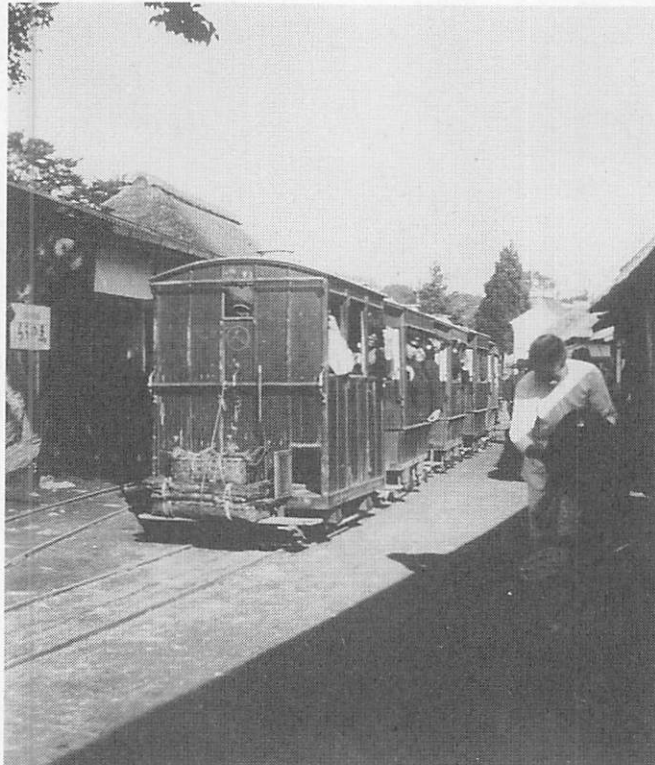
**亀之助と家族**

川越喜多院境内。亀之助に抱かれているのが博雄、後の農林大臣である。撮影場所の選定、家族の配置など細心の注意の後がうかがえる。

和田博雄の伝記『幻の花』には、この写真が掲載されていた。和田亀之助写真帳発見のきっかけとなった一葉である。



川越中学職員一同  
中央が増野校長、その右が亀之助。亀之助が写真に写るときの独特のポーズにご注目いただきたい。



「人車鉄道」  
修学旅行で小田原に向かう途中使用した「豆相人車鉄道」。伊豆と相模を結ぶ人力による鉄道である。



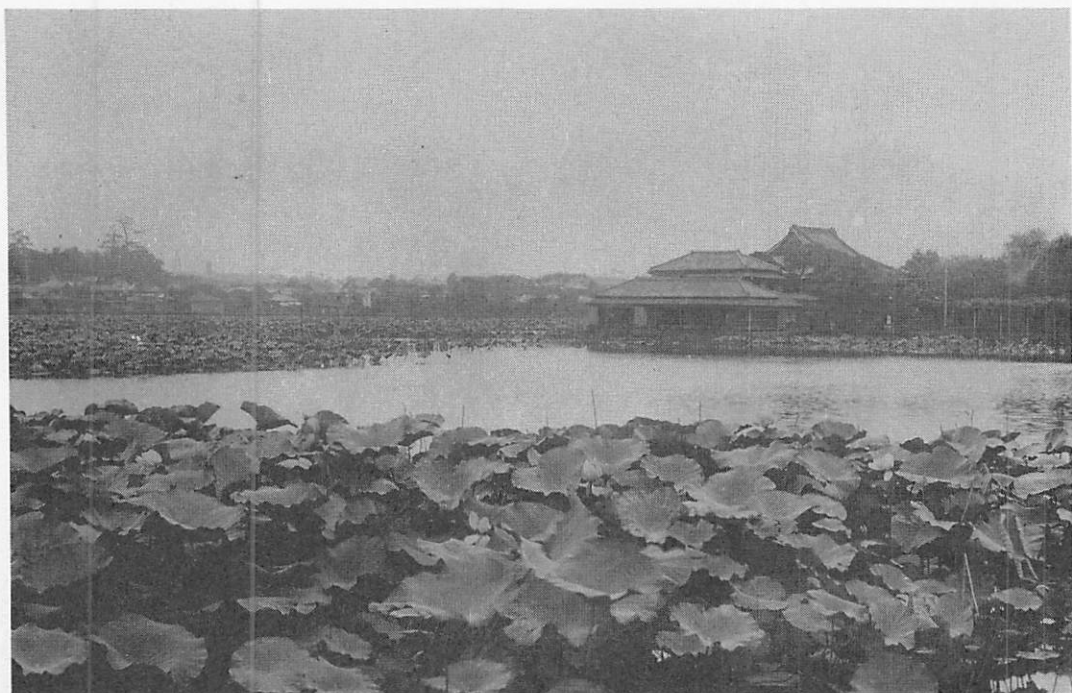
品川駅ホーム

修学旅行中、品川で乗り換えたときのスナップである。当時の川中生にとって、汽車に乗っての旅はどれほど胸弾むものであったろうか。品川駅のホームとその背景に百年の時の流れを感じさせられる。



日比谷公園（明治35年10月）

修学旅行の最後、川越に戻る前に立ち寄ったようだ。現在の公園とは全く趣が違う。



上野、不忍池  
高い建物などいっさい見あたらない。



東京築地付近（明治36年）  
「暑中休暇の旅」で撮影されたもの。当時の船の様子がわかり、興味深い。



岐阜ステーション

雨のため道はぬかるみ人力車夫は裸足である。立派な電信柱のみが「近代」を主張しているようだ。



嵐山渡月橋

明治30年代の渡月橋の情景、現在とは橋の様子も違う。人力車と、日傘を差す人の視線の先は川に膝までつかり、何かをとろうとしている人物であろうか。





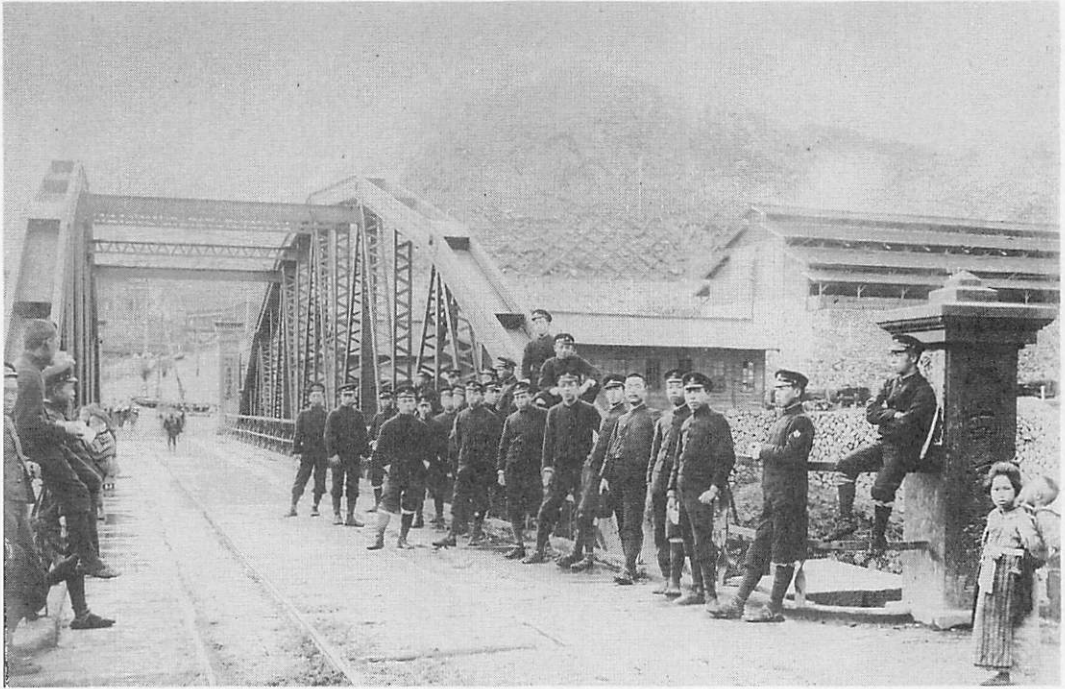
京都、三條大橋（明治36年夏）

亀之助が、夏期休暇中に撮影したもの。橋の下に床几の並んでいるのが見える。暑い京都で、涼をとるには絶好の場所であったのだろう。



足尾銅山

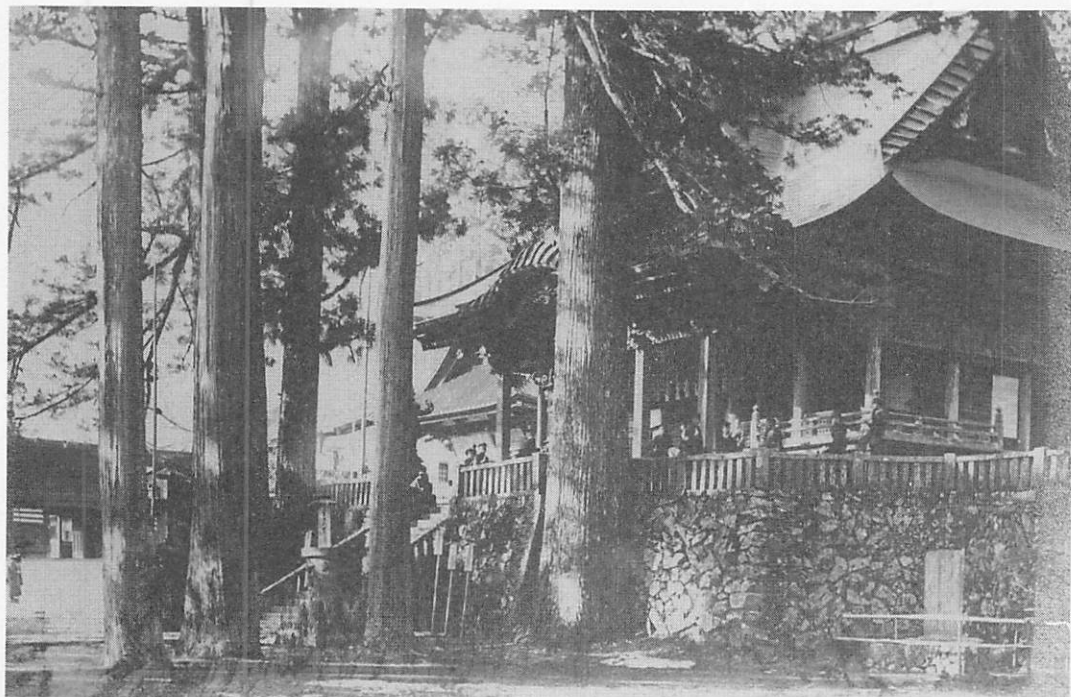
「足尾銅山。数町の坂を登れば遙かに禿げたる足尾を見る。陰道を降ること二里、毒煙朦々」とアルバムにある。亀之助は当時珍しい写真機を携えて全国各地を訪れているようだ。



足尾銅山、古川橋  
明治36年、五年生の修学旅行で。



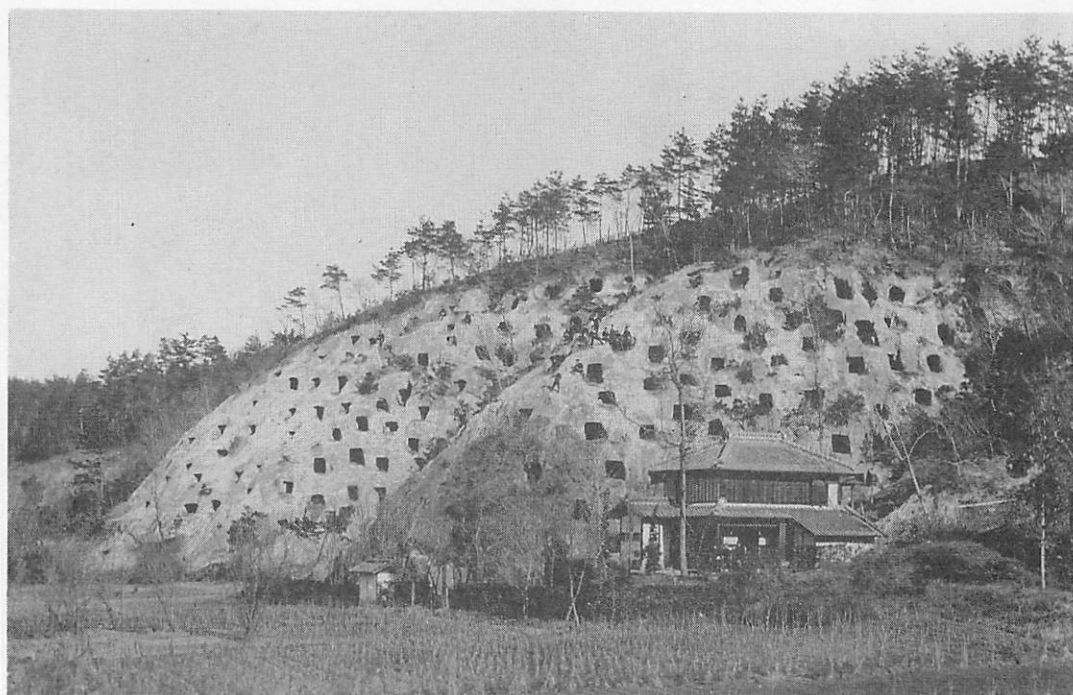
秩父旅行（明治34年4月）  
生徒を引き連れての秩父旅行の一コマ。右から六人目が亀之助である。



三峯神社（明治34年4月）  
同行した生徒の姿も見える。



松山遠足スナップ（明治34年）  
当時の遠足は、文字通り遠くまで歩く行事で、越生・松山・秩父など県内各地を歩き回っているようだ。写真は川越と川島を結ぶ「井草の渡し」。現在は「伊草」と表記されるが、当時は「井草」と書いていたようだ。



吉見の百穴全景（明治34年）

これも松山遠足のスナップである。よく見ると洞穴の周辺に生徒の姿が見える。



箭弓神社

松山遠足の目的地のひとつである。



川越郊外自転車遠足

どのあたりであろうか、場所の特定はできない。「自転車遠足」となっているが肝心の自転車は数台しか見あたらない。

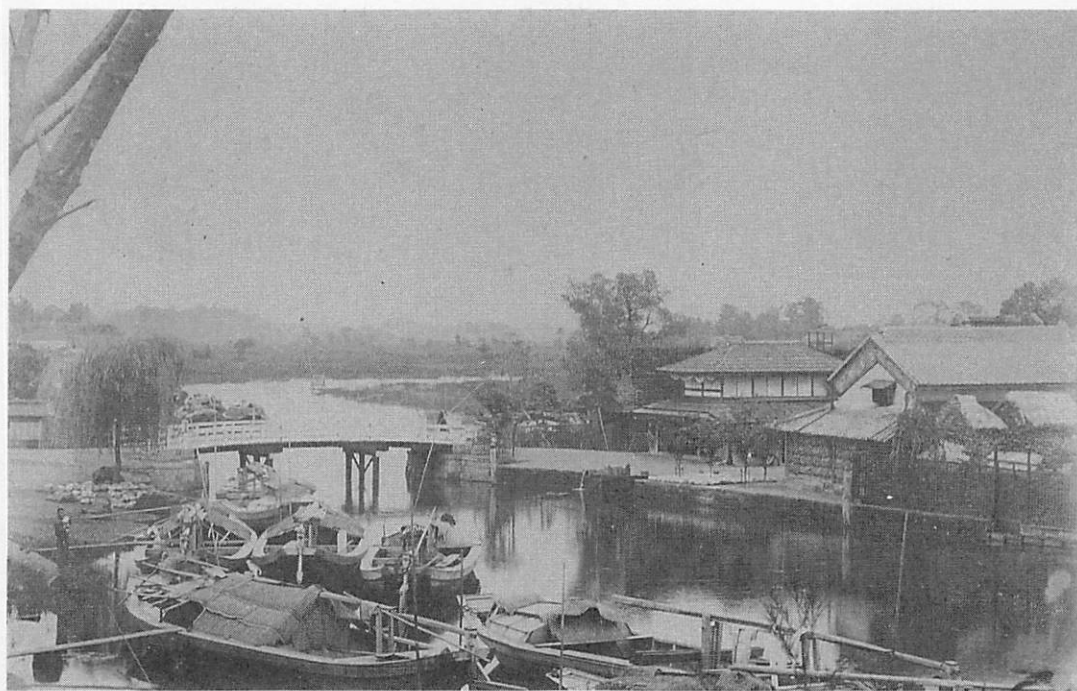


梅園行

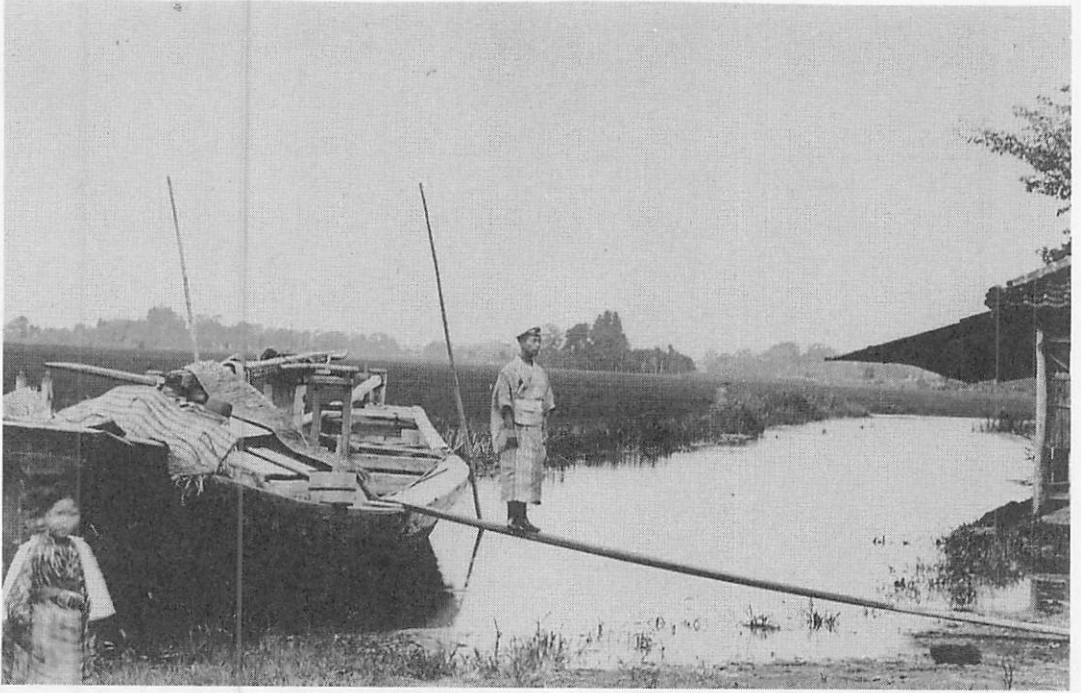
右から四人目が亀之助である。おそらく越生の梅林であろう。



伊佐沼  
今はすっかり整備された伊佐沼の情景である。



新河岸  
新河岸川の、舟運盛んなりし頃を思い起こさせる写真である。



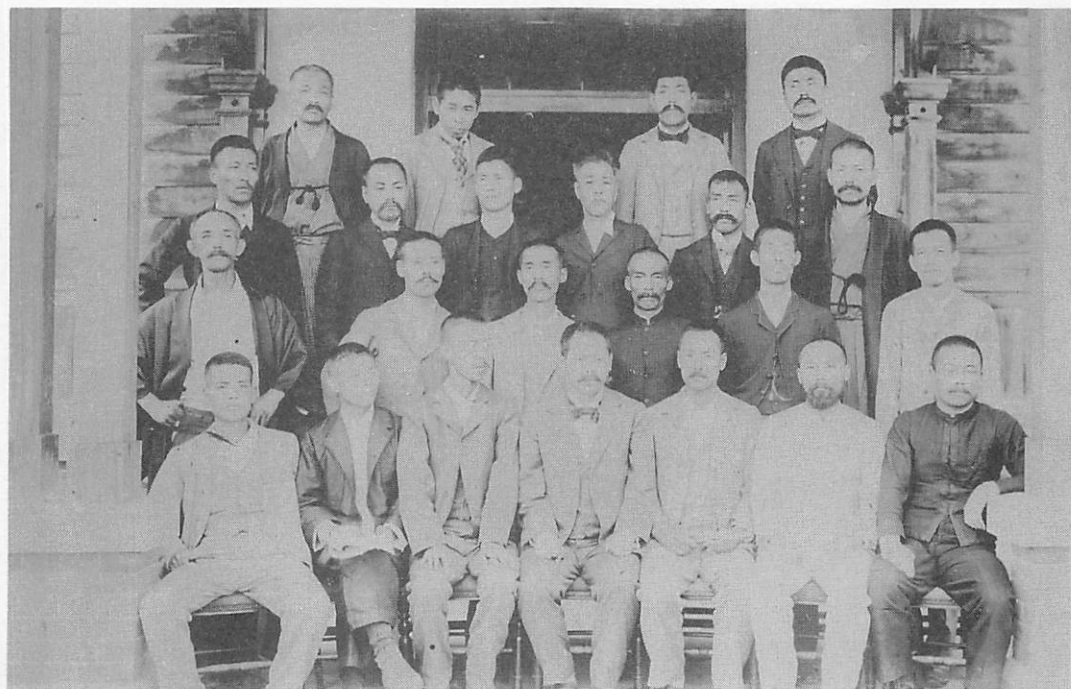
船着き場  
新河岸川の水路が川越仙波まで延びていた。



武蔵荒川の大出水（明治35年）  
仙台での物理化学講習から帰還する際に撮影。台風の中、当時の写真機でどのように撮影したのであろうか。

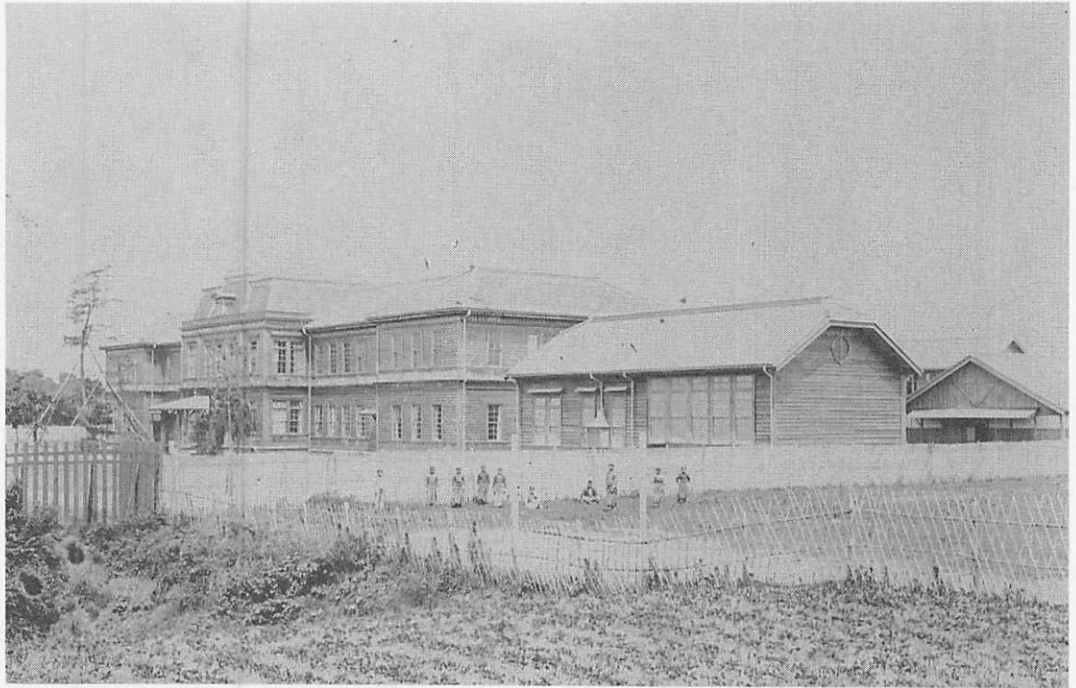


小仙波の瀧（明治34年8月）  
小仙波に水が湧いており、川越の観光名所のひとつになっていたようだ。



川越中学校職員一同  
明治35年6月に撮影されたもの。前列中央が、第二代校長小倉敏行氏。





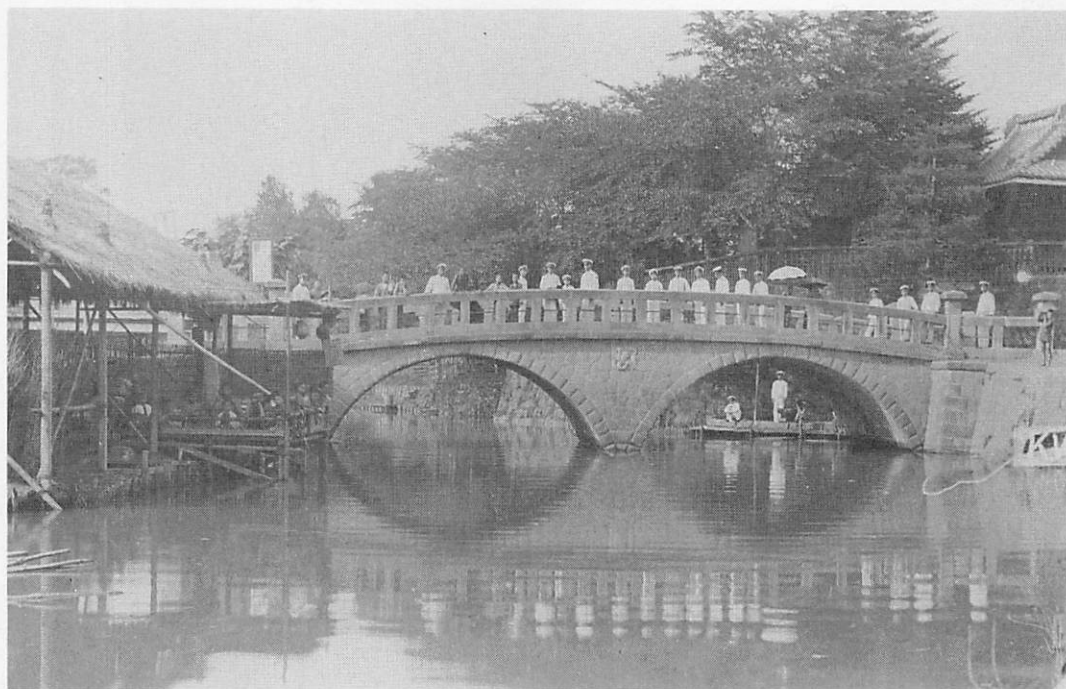
クック第五類レンズにて写す

校舎を東南から写した写真。クック第五類レンズというのは、当時大阪の桑田商会が輸入、販売していたレンズで、カタログによれば八つ切り用で百拾八円という価格がついている。小学校教員の初任給が十円程度の時代であるから、とんでもない高級品であったわけだ。校舎の東に特別教室棟、その北側に雨天体操場が見える。これらの施設が完成したのは明治33年5月のことである。



川越氷川神社

氷川神社から東方を撮影。見渡す限り田園が広がる。



眼鏡橋

明治20年にかけられた石組みの眼鏡橋（現在の高沢橋）



中学校の屋根より川越町を見る。  
手前左は川越高等小学校。右奥に時の鐘も見える。



時の鐘より中学校方面を望む。(明治34年11月)



川越南町

現在の川越から市役所方面に向かうバス通りである。左手前の蔵づくりの建物は足立屋呉服店。荷馬車が行き交い、着物を着た子供たちと、法被姿の職人たちが見える。洋服を着たものは一人として見あたらない。



秋の野（川越郊外）（明治33年10月）

のどかな田園風景である。家族で、魚をとりに来ているのであろうか。川越のどのあたりなのか、今となっては知るすべもない。



川越八幡の祭

旧士族による武者姿の仮装である。

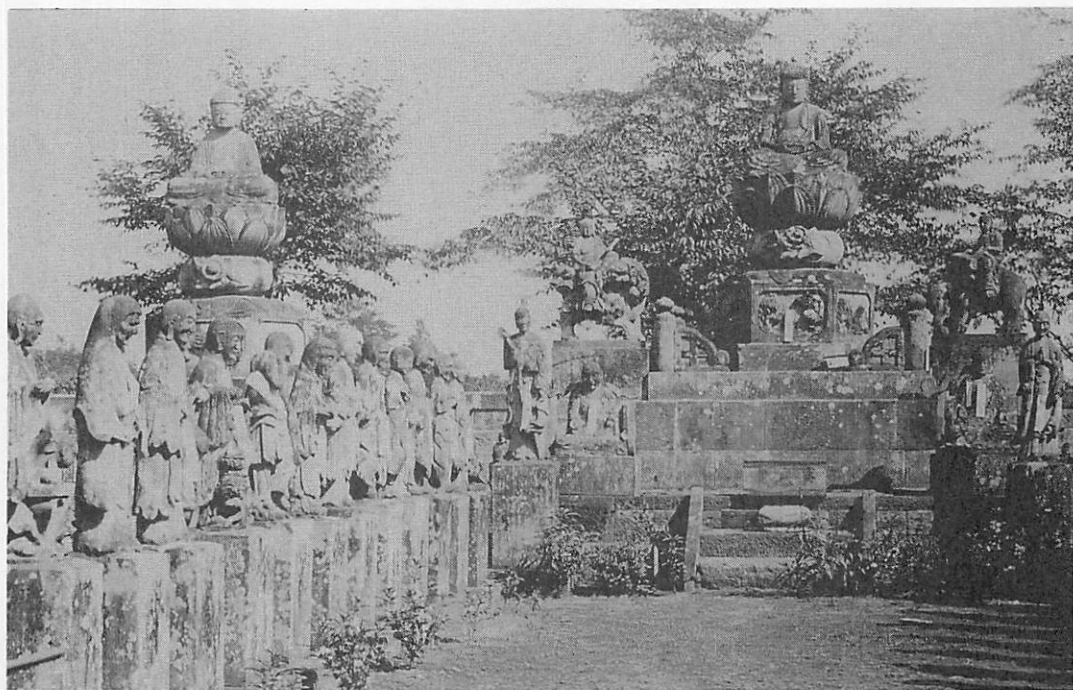


氷川の祭（川越）  
撮影は明治32年10月、祭装束に身を包んだ人々が「写真機」を前に少し緊張の面もちのようである。



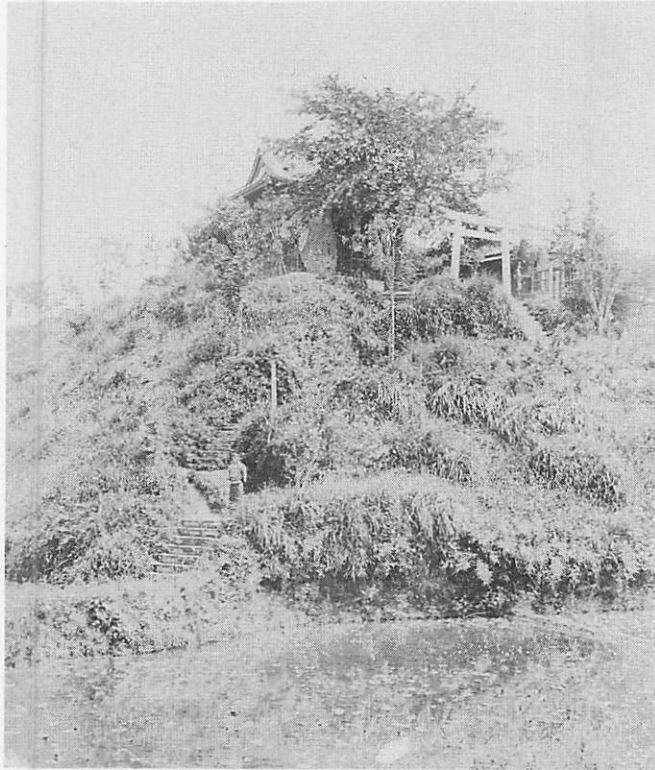
喜多院境内の桜（明治34年4月）

水川神社の大祭（明治34年10月）  
明治34年、川越大火からの復興を祝って行われた。



喜多院五百羅漢

亀之助のアルバムには喜多院の写真が数葉あるが、いずれも北院と表記されている。五百羅漢を包み込むような木々がほとんど育っていない。今では失われてしまった羅漢様もあるようだ。周囲の木々もまだ低く、空が抜けて見える。



川越城址  
富士見櫓である。御嶽神社が見えている。



第一回父兄会

開校の年、10月17日に開催された。前列左から四人目が増野校長、その右が亀之助である。



開校時の職員11名

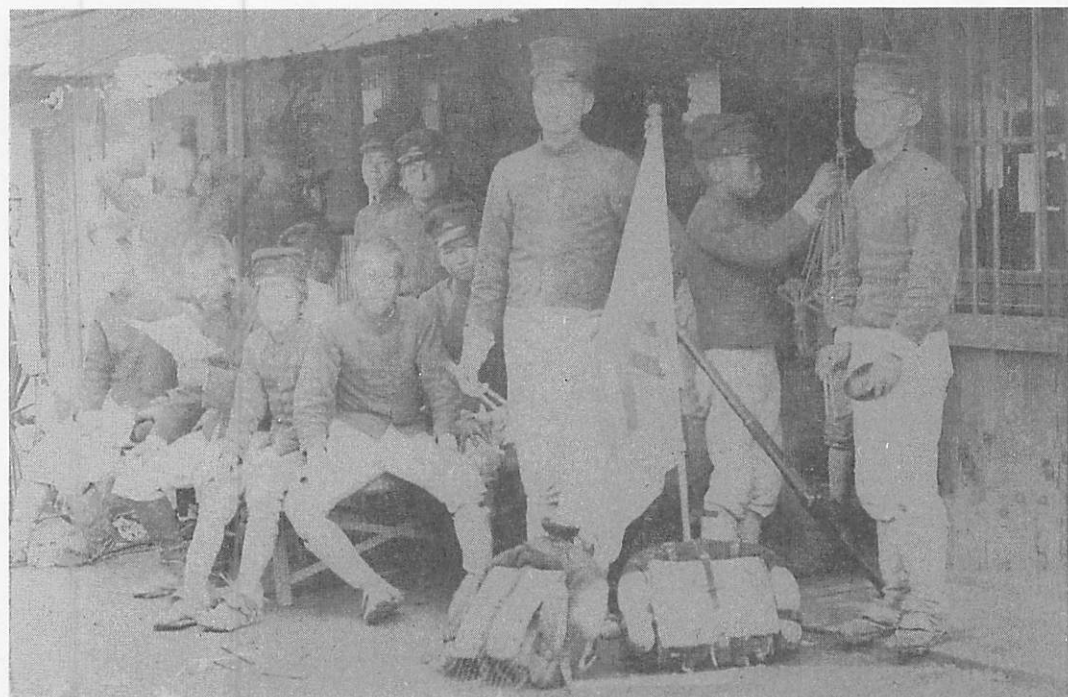
前列右から3人目が増野悦興校長。その左が教務主任の和田亀之助教諭。



兵式体操

体操の授業は「普通」と「兵式」とあわせて各学年3時間あった。これは「兵式体操」での行進と思われる。左奥の建物は雨天体操場、その奥の二階屋2棟が寄宿舎か。





発火演習 I  
明治35年3月1日が記録上、初めての発火演習である。



発火演習 II  
発火演習は、川越近郊の各地で実施された。



初代校長、増野悦興

我が子を抱く初代校長の肖像である。周囲に草花を配して二重焼きするなど、非常に手の込んだ写真になっている。亀之助の写真技術もさることながら、初代校長と教務主任の信頼関係を感じさせる写真である。